日本古典文学全集

方丈記
徒然草
正法眼蔵隨聞記
歎異抄

校注・訳
神田秀夫
永積安明
安良岡康作

小学館・刊

方丈記　徒然草
正法眼蔵随聞記　歎異抄　日本古典文学全集 27

1971年8月10日　初　版発行　ISBN4-09-657027-3
1995年11月1日　第二十六版発行

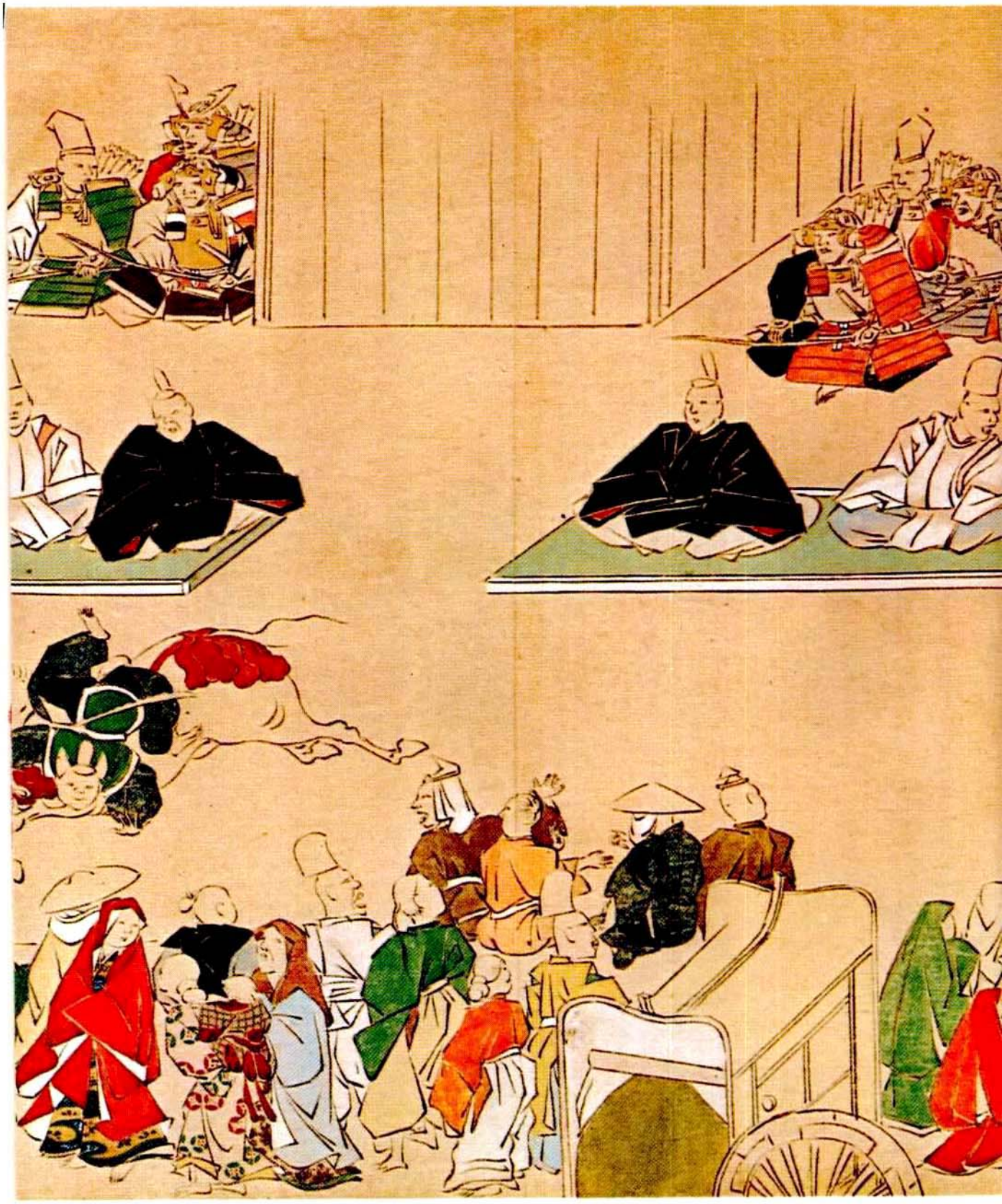
校注・訳者　神田秀夫
永積安明
安良岡康作

発行者　相賀昌宏
印刷所　大日本印刷株式会社
発行所　株式会社　小学館
〒101-01 東京都千代田区一ツ橋2-3-1
振替口座　00180－1－200
編集　3230―5141
電話(03)制作　3230―5333
販売　3230―5739

© H. Kanda Y. Nagazumi K.Yasuraoka 1971 (著者検印は省略いたしました)

■造本には十分注意しておりますが，万一，落丁・乱丁などの不良品がありましたらおとりかえいたします。
■本書の一部あるいは全部を，無断で複写複製(コピー)することは，法律で認められた場合を除き，著作者および出版者の権利の侵害となります。あらかじめ小社あて許諾を求めてください。　Printed in Japan

編集委員
秋山虔
市古貞次
五味智英
小山弘志
神保五彌
鈴木一雄
暉峻康隆
中田祝夫
題字
手島右卿



试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

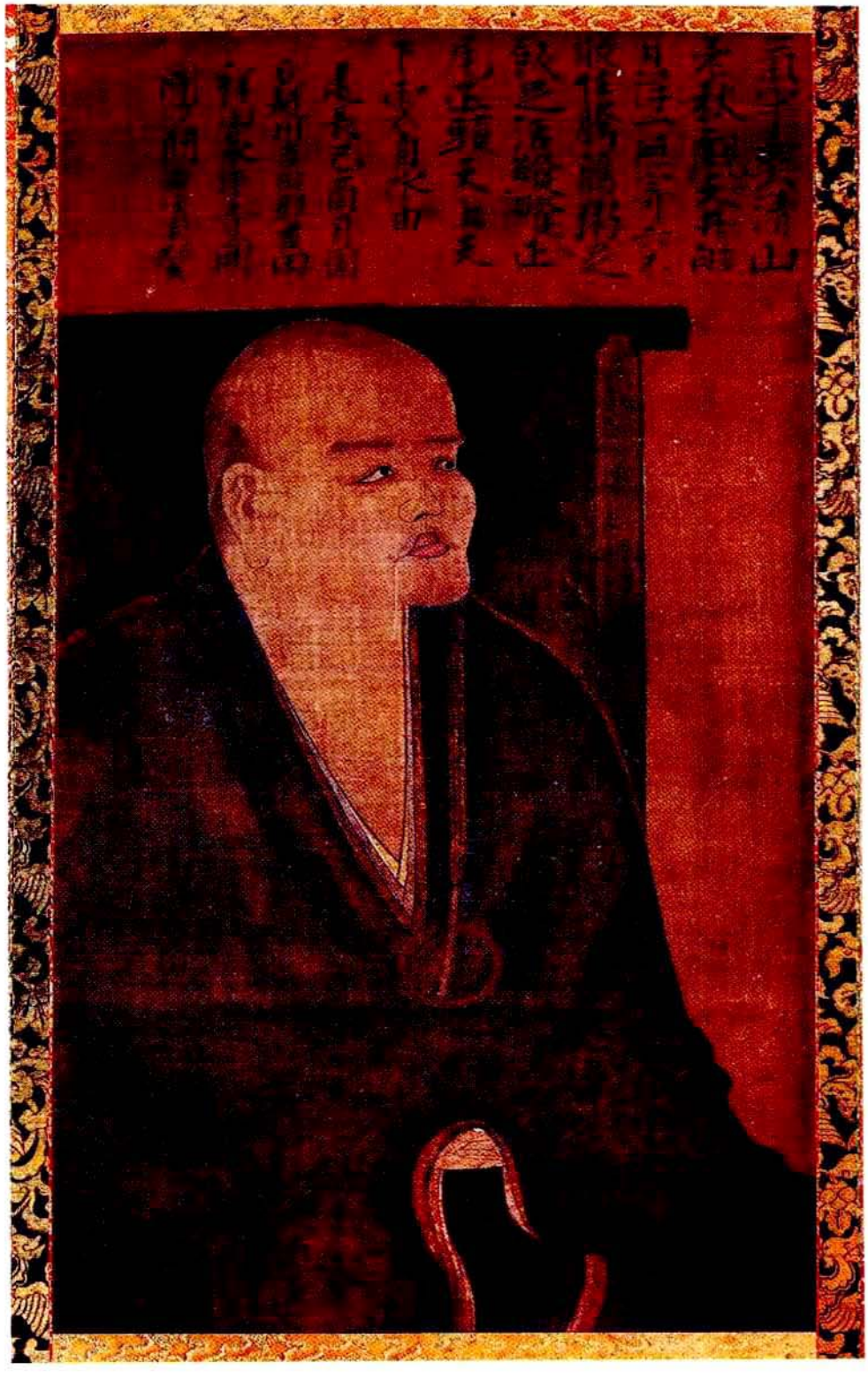
徒然草絵巻・第二巻／部分　　金沢文庫蔵

伝狩野探幽筆　兼好画像　　金沢文庫蔵

兼好の肖像は、画像・木像をあわせて、江戸時代になってから数多く作られたが、それぞれ、各自が理解したさまざまな兼好を造型しており、共通のイメージは形成されていない。しかも、およそ近世的に俗化されたものが多い。狩野探幽筆と伝えられている（じっさいはもっと時代が下るようだが）この画幅の像は、ひきしまった、その顔面の表情にも、また脇息に寄る姿態にも、一つの強い性格が描きだされており、卑俗なものの多い兼好の画像中、おそらく出色の作品である。左右二六・六cm（永積安明）

道元画像

宝慶寺蔵



上部に道元の「気宇爽清なり、山老の秋。天井を覩ればば、皓月浮かぶ。一も寄るなく、六も収めず。任騰騰として、粥足・飯足なり。活鱍鱍として、正尾・正頭なり。天上天下、雲自、水山なり。建長己酉月円かなる日　越州吉田郡吉田祥山永平寺開闢、沙門希玄自賛」という建長元(一二四九)年、五十歳の時の自賛を記す。「希玄」は、道元の別名。

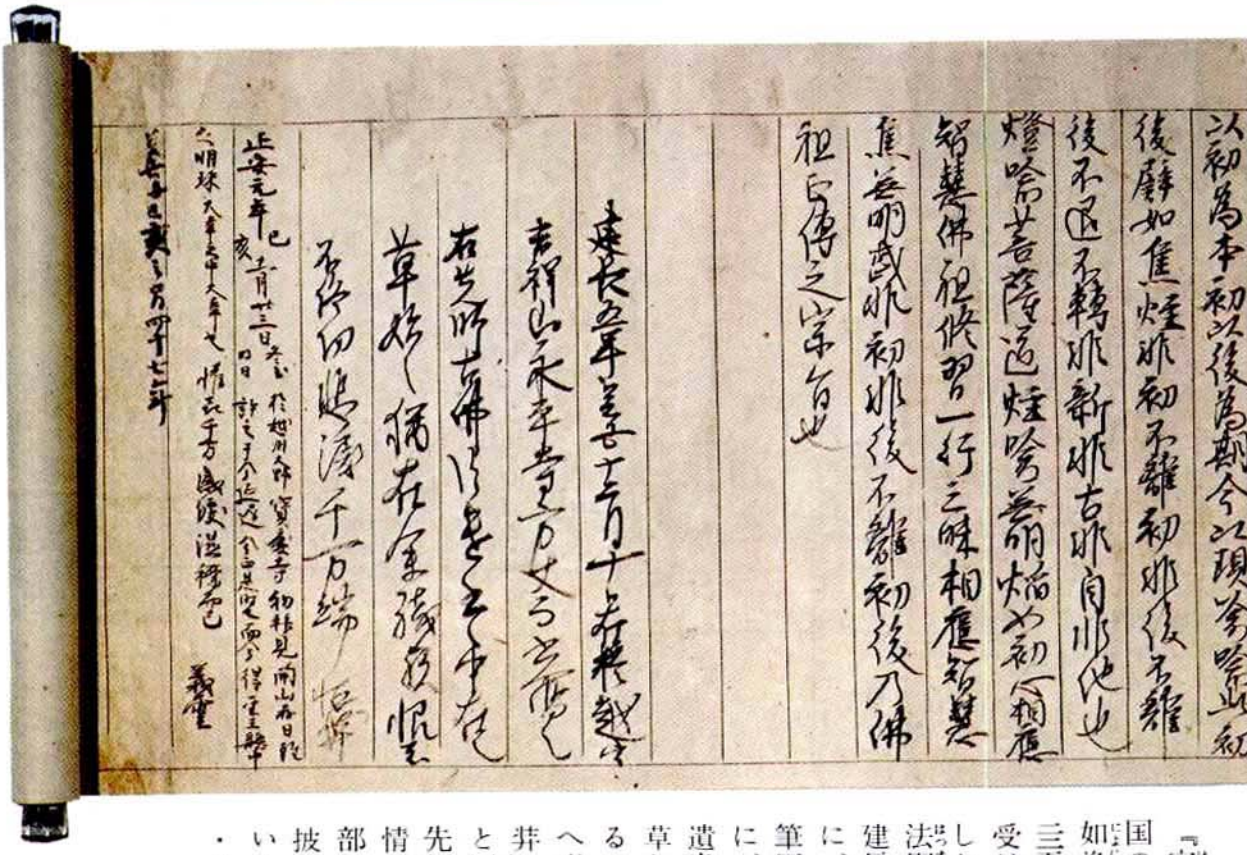
この中の第二句により、「月見の画像」と称される。大久保道舟氏は、永平寺第五世義雲により、道元寂後、六、七十年を経て、複写されたものと考証されている。現存の道元の遺影中、もっとも信頼し得る、最古の作である。左右五三・二cm

(安良岡康作)

宝慶記・巻頭

全久院蔵

宝慶記・巻末

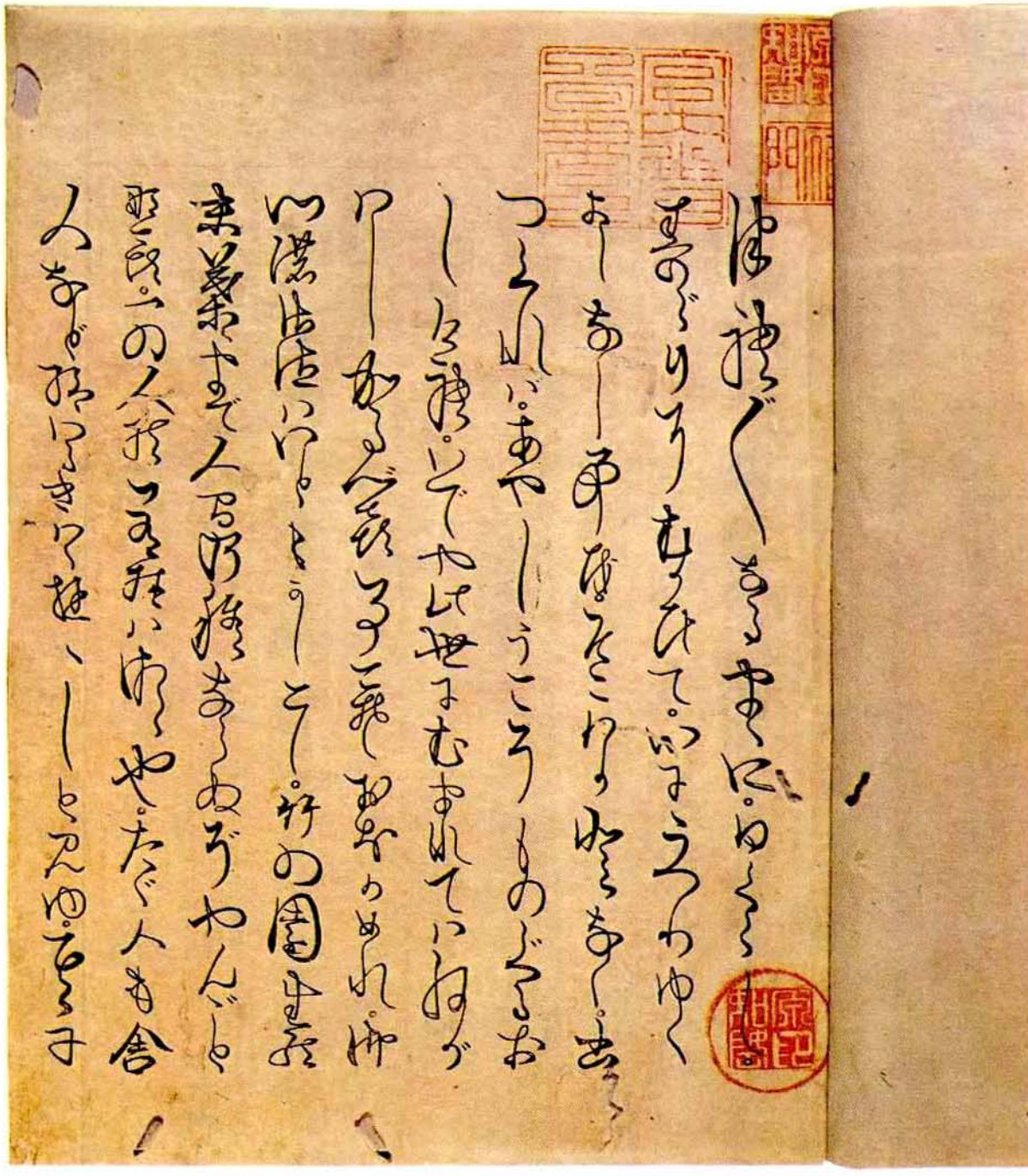


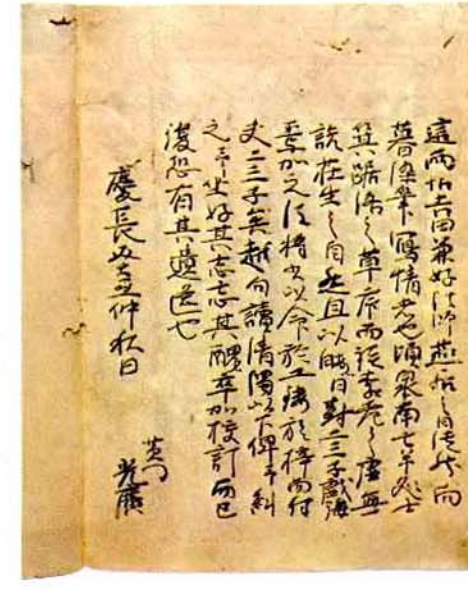
『宝慶記』は、道元が、中国の天童山景徳寺において、如浄に参禅した宝慶年間（一二二五～二七）に、直接、示教を受けたところを、漢文で記した遺著であるが、それを法嗣の懐奘が、道元入寂の建長五（一二五三）年十二月十日に、永平寺の方丈において筆写したものである。奥書に、「右は、先師古仏の御遺書中にこれ在り。これを草し始めしも、猶、余残あるか。恨むらくは、功を終へず。悲涙千万端なり。懐奘」とあって、『随聞記』と同じく、懐奘の至純なる、先師道元への傾倒、追慕の情がうかがわれる。その後部に、永平寺第五世義雲の、披閲し得た感激が記されている。巻子本一巻。縦二五・八cm　（安良岡康作）

大福光寺本　方丈記・巻頭　　大福光寺蔵

京都府船井郡丹波町にある古義真言宗の古刹大福光寺は『方丈記』最古の写本を蔵している。江戸時代初期（延宝年間）までは、京都の醍醐寺にあったらしい。現在は重文に指定され、京都国立博物館が保管の任に当たっており、大正十四年には古典保存会が複製本を、昭和三十四年には武蔵野書院が影印本を出した。原本は巻子本で、写真に見られるごとく、鎌倉時代の古体の片仮名を存し、本書解説に述べたごとく、おそらく作者の自筆本である。縦二八・二cm　（神田秀夫）

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

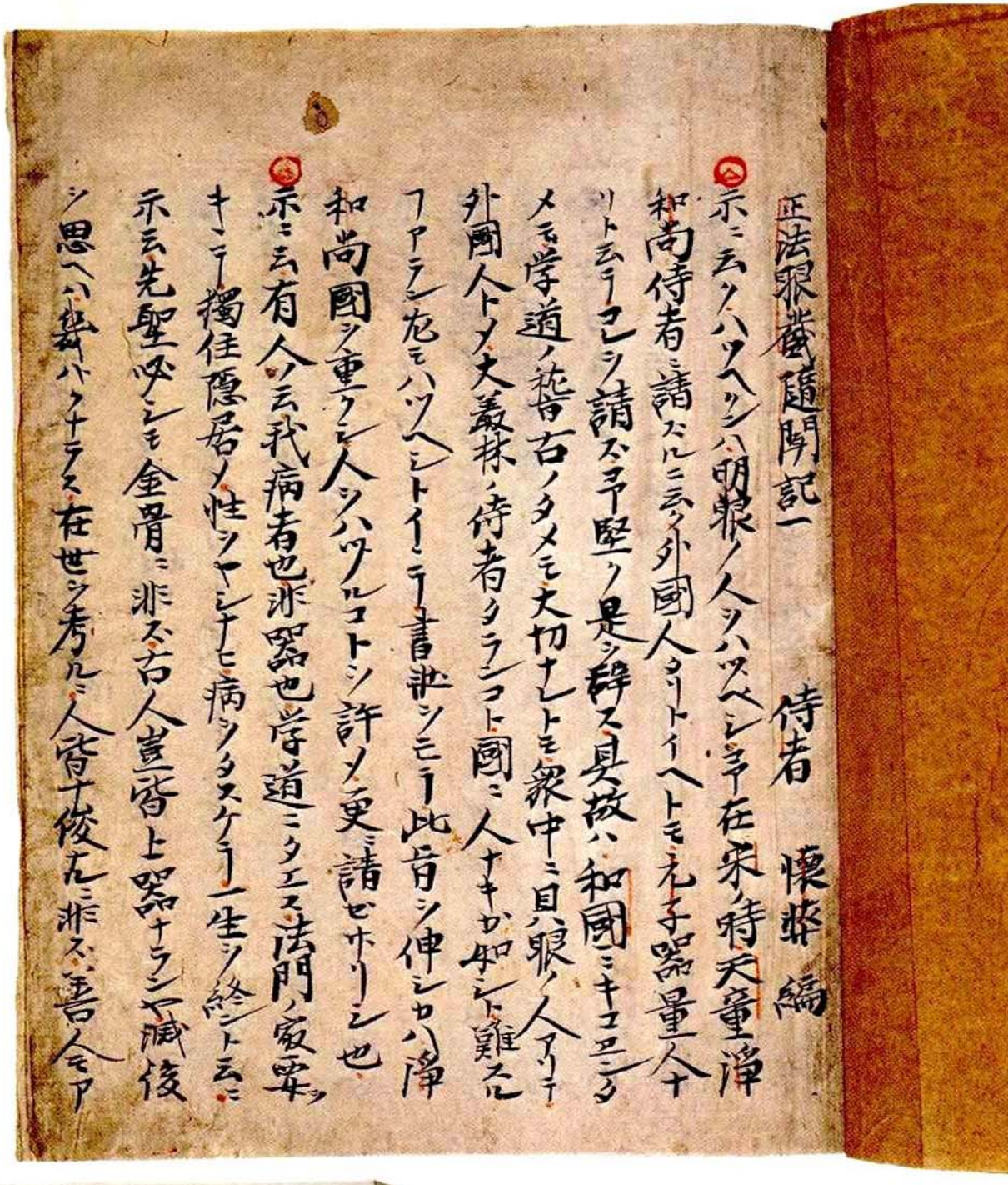




烏丸本　徒然草・冒頭　奥書

宮内庁書陵部蔵

烏丸本『徒然草』（上・下二巻、古活字版）は、近世初期の儒者三宅寄斎が書写した伝本によるもので、寄斎はこれを上梓するに先立ち、烏丸光広に句読・清濁を施すことを乞うた。光広は諾して校訂を終え、慶長十八（癸丑）年、その旨を奥書として記した。烏丸光広は細川幽斎に古今伝授を受けた近世初期の代表的な堂上文人であるから、その校訂になる烏丸本は尊重されて、『徒然草』の諸本中、もっとも流布して今日に至っている。本書の影印は、宮内庁書陵部蔵本によった。縦二八・八cm（永積安明）



正法眼蔵随聞記一　　侍者　懐奘　編

示ニ云ハツヘシハ明眼ノ人ヲハツヘシ予在宋時天童淨和尚侍者ニ請スルニ云ク外國人タリトイヘトモ元子器量人ナリト云テコレヲ請スヲ堅ノ是ヲ辞ス其故ハ和國ニキコエニシタメ学道ノ蒭古ノタメモ大切ナレトモ衆中ニ目眼ノ人アリテ外國人トノ大義抹ノ侍者タランコト國ニ人ナキカ如シト難ス

フアラン左モハツヘシトイヘリ書狀ヲモテ此旨ヲ伸シヤハ淨和尚國ノ重ノ人ヲハツルコトヲ許ノ更ニ請ヒサリシ也

示ニ云有人ノ云我病者也非器也学道ニタエス法門ノ寂寞キニテ獨住隠居ノ性ヲヤシナヒ病ノタスケヲ一生ノ終ントスル示云先聖必シモ全骨ニ非ス古人豈皆上器ナランヤ滅後ヲ思ヘハ蒭ハナヲ在世ノ秀ルニ人皆十俊ナルニ非ス善人モアルヘシ古人モ有語後箇坐禅トモ進メタルトモ猶坐ヲ専ラ進メシ也又語類ムルニ悟アルヒトモ其モ坐ノ理ヨリモ悟関ノ用法ヲサヒキカ坐ニアルヘシ

○先師水平寺和尚在學地日學道至要隨聞記録所以謂隨聞如雲門室中去記如水平寺八慶記今録集八冊記録入録名正法眼蔵拾遺分四八冊俱嘉禎年中記録也

正法眼蔵隨聞記八終
康暦二年五月初三日於寶慶寺浴主寮書焉
三州碧海郡平島山　長圓二世呼望寫也

愛知県西尾市貝吹の万燈山長円寺所蔵の写本で、同寺第二世暉堂宋慧が寛永二十一（一六四）年に筆写したものである。奥書によれば、その原本は、南北朝時代の康暦二（一三八〇）年（北朝の年号）に、宝慶寺において書写されたという。宝慶寺は、懐奘の法嗣である寂円の開いた寺で、「月見の画像」をはじめ、道元関係の法宝が多いので、この写本の由来も信ずべきものがある。縦二五・五cm（安良岡康作）

他力之宗旨仍故親鸞聖人御物
語之趣所留耳底新註之偏為散
同心行者之不審也

一 弥陀ノ誓願不思議ニ助ケラレ
マイラセテ往生ヲハトルナリト信
ジテ念佛マウサントオモヒタツコロ
ヲ摂取不捨ノ利
益ニアヅカシメタマフナリ 弥陀ノ本
願ニハ老少善悪ノヒトヲエラバレス
ヲ信心ヲ要トストシルベシ ソノ上ハ

歎異抄
竊思茅
粗勘古今歎異先師
傳之真信思有後學相續之疑
惑幸不依有縁知識者半得入場
行一門貳全以自見之覺語莫乱

粘葉装の古写本で、巻末に近い綴じめに、「永正十六　ウノトシ　十二月十三日」の文字が見え、これが書写年代を示すものと考えられるので、「永正本」と呼ばれている。永正十六年は、一五一九年。謹厳な態度で、片仮名と漢字のみで筆写され、濁点を加えない。西本願寺所蔵の蓮如筆写本に次ぐ、古写本として尊重されている。縦二二・七cm

（安良岡康作）

善信聖人絵・上巻／部分　　西本願寺蔵

『善信聖人絵』二巻は、本願寺第三世の覚如が、親鸞寂後、三十三年を経た永仁三(一二九五)年十月に、「知恩報徳」のために述作した伝記で、絵は、康楽寺流の画家、浄賀の筆。後に、この詞書だけを独立させたものを『御伝鈔』、絵図を写して掛軸にしたものを『絵伝』という。写真は、その上巻で、「信心争論」の段。『歎異抄』の「後記」と同じく、師法然(中央)の前で、「信心」について論争する親鸞(左)と、それに対する聖信房・勢観房・念仏房たち(右側)とを描く。縦三一・九cm　(安良岡康作)

目次

方丈記　神田秀夫 校注・訳

解説……五
凡例……三三
本文……二七

徒然草　永積安明 校注・訳

解説……五三
凡例……七九
目次……八五
本文……九三
校訂付記……二八六

正法眼蔵随聞記　安良岡康作 校注・訳

解説……二八九

凡例……三〇五
本文……三一一
校訂付記……四九五
出典集……四九九

歎異抄

安良岡 康作 校注・訳

解説……五〇七
凡例……五二三
本文……五二七
校訂付記……五六三

口絵目次

徒然草絵巻……1
兼好画像……5
道元画像……6
全久院本宝慶記……7
大福光寺本方丈記……8
烏丸本徒然草……9
長円寺本正法眼蔵随聞記……10
永正本歎異抄……11
善信聖人絵……12

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com